

日本社会にあってあの時代を生きた者たちはすべからずアジア太平洋戦争を体験しているが、「戦争を体験した」と一口に言ってもその内実は、世代によって大きく異なる。成人男性であれば徴兵され、戦場で実際に敵軍との戦闘を、あるいは飢餓を、体験しただろう。一〇代後半であれば戦地の遠からぬ死を自らの運命として自覚していたかもしれない。あるいは幼い子供であれば、訳も分からず空襲の下をただ逃げ惑うだけだったかもしれない。生まれの一年の違いが生死を劇的に分けたこともあったかもしれない。

一七歳だった私の亡父は、一九四五年八月、広島島の陸軍幼年学校を卒業し、霞ヶ浦の航空隊基地で任官を待っていて敗戦を迎えた。一年早く生まれていれば、南洋に送られて餓死していたかもしれない。一年遅ければ間違ひなく原爆で死んでいただろう（爆心地にあった幼年学校で、一期下の者たちはあの日、ほぼ全員が亡くなったという）。同じことは「ナクバ」（ユダヤ国家の建国にともないパレスチナ人を襲った民族浄化の

悲劇をパレスチナ人はアラビア語で「ナクバ（大いなる破局）」と呼ぶ）についても言える。一五歳なら銃を手にして、ユダヤ軍との戦闘に参加していたかもしれない、一〇歳なら嵐の中を木の葉が舞うごとく、訳も分からずただ逃げ惑って、難民となっていたかもしれない。では、一二、三歳の少年だったなら：？ アッカーの富裕な弁護士家庭に生まれたガッサン・カナファーニー（一九三六年生まれ）がナクバによって一転、難民となったのは一二歳のときだった。

イスラエルの秘密諜報機関による爆殺で三六歳という若さでその生涯を閉じるまで、カナファーニーは、自身のその早すぎる死を予感するかのように、パレスチナ難民の生のありようを何十という短編作品に形象化した——人間がある日突然、一切合財を失って、その故郷の大地から根こそぎにされて難民となるとは、いったいいかなる経験なのか。人間が難民として生きるとはどういうことなのか。祖国を剥奪された人間が、祖国に帰還するとはいかなることなのか。人間にとって祖国とは何なのか……。カナファーニーがナクバの記憶を描いたいくつかの作品には、本作をはじめ「悲し

いオレンジの実る土地」や「ラムレの証言」（いずれも第二短編集『悲しいオレンジの実る土地』（一九六三年）所収。日本語訳は、前者は『季刊 前夜』第8号に、後者は同第3号に拙訳あり）など、成人した語り手が、少年時代に体験したナクバの記憶を回想するという体裁で語られたものがいくつかある。そこで描かれる「少年」の体験の内容は作品ごとに異なっているものの、しかし、その根底には、一二歳で難民となった——ならざるを得なかった——著者自身のありようが色濃く反映しているように思われる。

一二歳は子供だ。子供は選ぶ術もなく、ただ見ているしかなかっただろう、パレスチナが一センチずつ敵の手に落ち、自分たちが一センチずつ後退していくのを（梟は遠き部屋に）。そして、選ぶ術もなく、家具と一緒にトラックの荷台に載せられて、国境を越えて難民となって、一切を失った父親が、難民となっても免れることのできない家長故の責任から次第に精神を失調させ、やがて子供を手にかけて、不条理のすべてに暴力的に終止符を打とうとする様子をただ見つめているしかなかっただろう（「悲しいオレンジの実る土地」）。だが、一方で、一二歳は子供ではない。訳も分からず出来

事にただ翻弄されるだけの子供とは違う。それが真に意味するものを知るのは、はるかのことであつたとしても。少年は記憶している、目にしたものの、耳にしたものをすべて。殺された娘と妻の亡骸を葬つてきた老人の、汗にまみれ、埃にまみれ、疲弊した、その無言の眼差しの中に秘められた決意を(「ラムレの証言」)。命尽きるまで斧で闘つた男たちがいたこと。彼らが歌を口ずさみながら、故郷のかぐわしい大地に抱かれて、死んでいったこと。父が母に拳銃を渡すのを見て、すべてを悟つた姉が泣いたこと……(敵の男たちに凌辱される前に、母親の手によって娘を殺せということだ)。

幼い子供と違って、出来事の意味するところを理解しながら、しかし、少年は、銃をもって闘うほど大きくもなかつた。だから大人の言いなりになるしかなかつた。故郷が奪われていくのをそれとして知りながら、しかし、何もできずに、難民となるという運命をただ甘受するしかなかつた。ナクバをいかに体験するかは人によってさまざまだが、奪われゆく祖国を目にしなが、何もなしえないという形でそれを体験したこと、それが、カナファニーにとって決定的であつたのではないか。その体験は彼

において、つねにそこにたち還つてナクバを考える、ひとつの根源的なものとしてあつたのではないか。彼の作品を読むほどに、そう思わざるを得ない。「当時は子供だったのだから、仕方のないことだった、自分には責任はない」と自らを慰める代わりに、あたかもタイムマシンで、トラウマ的記憶の原因となつた同じ出来事の渦中に繰り返し舞い戻るように、かつての自分と同じ年ごろの少年たちにナクバを目撃させ、自分たちが何もなしえぬまま難民とならざるを得なかつたあの出来事を体験させている、繰り返し、幾度も。あたかも、そこ、ナクバの記憶の中にこそ、未来への答えがあるかのように。

それをひとまず「不能の感覚」と名づけるならば、その不能感、子供のみなならず、青年を主人公とするカナファニーの初期作品のいくつかににおいても色濃く表れている。たとえば本作と同じくカナファニーの第一短編集『第12号寝台の死』(一九六一年)に収められた「五月半ばに」(muntasaf mayar)、「過ぎ去らな、こそ」(shaiun la yachhab)の二作品の主人公は、前者がおそらく一六七歳、後者は二〇歳くらいか。年齢に若干の違いはあるものの、銃を持って闘おうと

思えば闘い得た若者たちである。いずれの作品も、ナクバを生き延びてしまった主人公/語り手が、数年後、あの頃、あのとき——ナクバ——を回想するという形で描かれる。いや、共通点はそれだけではない。主人公にとってナクバとは、親友が(「五月半ばに」)、あるいは恋人が(「過ぎ去らないもの」)、生か死か、決断するか逃げるかの選択を迫られ、そこにとどまり闘うことを選んで命を散らしていった出来事であつた。今は亡き友を、あるいは恋人を回想するのは、ナクバを想起することであり、ナクバを想起するとは、決断し、闘い、そして死んでいった者の生と死を想起すると同時に、そこに踏みとどまらず、闘いえず、生き延びてしまった自分——その不能性——を逆照射することでもあつた。運命に對峙し、闘うことを選んで死んでいった者たちに言及しながら、しかし、これらの作品を覆うのは、むしろ、闘い得なかつた「自ら」の不能性である。カナファニーは、主人公である「ぼく」にある種の「不能性」を帯びさせ、その「不能」の苦い記憶と共にナクバのあとを生きさせている。

その不能性は数年後、カナファニーの代表作の一つとなる中編『太陽の男たち』

(Friedrich Schlegel 一八六三年)において、トラック運転手アブー・ハイズラーンの性的不能によって象徴され、そして同じく代表作『ハイファに戻って』の主人公、サイード・S夫妻が赤ん坊を家に残したまま、奔流に押し流されるように難民とならざるを得なかった不能性、そして、難民となつて一九年間、故郷に置き去りにした息子を取り戻すために何事もなしえなかった不能性として描かれることになる。ナクバによってパレスチナ人に刻印された不能性をいかにして可能性へと転化するか、それが、一二歳でナクバを体験し、この不能性を不可抗力的に分有していたカナファニーが抱えていた一つの課題であつたと言えるだろう。

のどかなパレスチナを突然襲うユダヤ軍によるテロルという、ナクバの始まりを描いた、カナファニー晩年の作品「まだ幼かったあの日」(Kama yamudhka thlan 『季刊前夜』第4号に拙訳掲載)で、バスの乗客のなかでただ一人虐殺を免れた主人公の幼い少年は——生き残った少年の口を通して出来事を人々に知らしめ、パレスチナ人のあいだにパニックを起こさせるために敢えて彼だけ殺されなかったのだ——、「走れ、ぐずぐ

ずしていると殺すぞ」とユダヤ人司令官に命令されるが、しかし、自らの死刑執行を覚悟するかのようには、ゆっくりと、決然とした足取りで歩いていく。一九六〇年代後半、青年たちが銃を手にとり、自らの手でパレスチナの解放と帰還を取り戻そうと立ち上がったこの時代、死を突き付けられてなお、幼い少年さえ、理不尽な暴力にその全身で「否」を表明し、逃げ去ることよりも現実と対峙し、その運命を自ら引き受けることを選択するようなものとして、ナクバは思い描かれることになる。

さて、本作は、一九六一年に出版されたカナファニーの第一短編集『第12号寝台の死』所収、カナファニー二三歳、クウエイト時代の作品である(カナファニーの生涯については、河出書房新社刊のカナファニー作品集『現代アラブ小説全集7 太陽の男たち/ハイファに戻って』の記者あとがきに詳しい)。

ナクバから一〇年、故郷の大地から根を断ち切られ、祖国から放逐された者たちは難民となって四散し、家族もまた離散する。あのととき子供だった少年は、クウエイトかどこか異邦で、ひとり孤独に暮らしている。ある日、たまたま目にした写真の梟の眼差

しに、忘却の彼方にあつたナクバの記憶が甦える——生か死か、逃げるか、踏みとどまるか。踏みとどまり、闘い、死んでいった男たちがいた。夫の死を耐えていた女たちがいた。梟は叫ぶ、幼かつたお前もまた、あのととき、男たちと同じように、踏みとどまることを、そうすることで運命における決死の跳躍をすることを選んだのではなかったか。なのに、それを忘れて、今のお前のさまは何だ。哀れな奴め。思い出せ、自分が何者なのかを思い出せ。それはすべて、ナクバの、あの闇夜の出来事の中にある。